

ペットライフ

mail:bunka1@ma.kitanippon.co.jp



廣瀬動物病院長
(富山市石坂新)

廣瀬 僚

26

獣医師は皮膚や皮下に「できもの」ができた」と相談を受けることが多々あります。

この「できもの」という言葉は非常にくせ者です。小さくても悪性腫瘍(がん)の場合もあれば、比較的大きなものでも良性腫瘍である場合もあります。また、血を吸って大きくなったマダニや皮膚病、ケンカが原因でうみが溜まったもの(膿瘍)、とげが刺さって起こした炎症(異物肉芽腫)、正常な唾液腺やリンパ節などといった、そもそも腫瘍ではない「できもの」にも遭遇します。

獣医師が皮膚や皮下に「できもの」を見つけた場合、まずは場所

皮膚・皮下の「できもの」



CT検査で確認された、犬の腹筋から発生した悪性腫瘍(赤丸部分)

写真の患者さんは、「皮膚が高ければ治療薬を処方します。良性腫瘍とみられる場合は経過観察をし、悪性腫瘍の可能性があれば、検査を追加し、手術計画を立てます。」

「できもの」に早く気付くポイントです。これまで存在しなかった「できもの」に触れた場合は動物病院で確認してもらいましょう。

のですが、小さなものや初期のもの、大抵見た目や触診では良性腫瘍との区別が付きません。また、小さくても進行が早く、悪性度の高い腫瘍も存在します。

小まめに動物の体を触ることが

悪性腫瘍の可能性も

や大きさ、色、形、硬さなどを確認し、その経過を問診します。マダニなど明らかに見た目で判断できるものを除外した上で、次に、その「できもの」が炎症なのか、腫瘍なのかを考えます。

その際にまず行う検査が細胞診です。できものにスライドガラスを捺印するように押しつけ貼り付いた細胞や、注射針で採取した細

胞を顕微鏡で観察します。細胞診は炎症と腫瘍のどちらの可能性が高いのか、腫瘍の可能性があれば良性和悪性のどちらの可能性が高いのか、どのような種類の細胞が増えているのか、などを区別する大切な検査です。また、動物への負担が少なく、短時間で比較的安価に行うことができます。

その所見を元に、炎症の可能性

皮膚の下にできものがある」という症状を訴え来院されました。触ると少しポコッとしている程度の小さなものでしたが、細胞診では悪性腫瘍を疑う所見があり、追加で複数の検査をしたところ、筋肉から発生した悪性腫瘍であることが分かりました。悪性腫瘍の場合、進行した大きなものは見た目だけで悪性腫瘍かな、と推察ができる